学　年	教科等	単元名	日　時
第１学年	算数科	ものとひとのかず	令和４年１月 20 日(木) ４校時

○　子どもの姿からの報告

子どもに「問い」をもたせるしかけの在り方

本時において、子どもにもたせたい「問い」は２つあった。

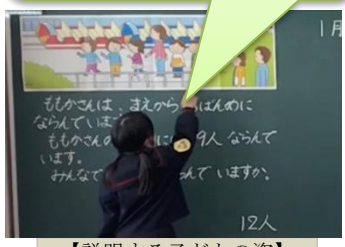
本時でもたせたい「問い」①

３＋９でいいのかな？

「問い」をもたせるしかけ

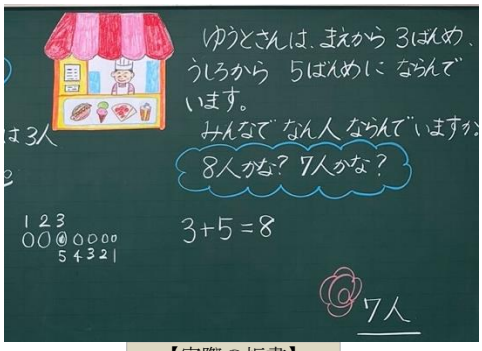
「３番め」と「９人」の単位の違いを確認し、「３番めと９人は足してもいいのかな。」と揺さぶることで、「本当にいいのかな？」という疑問をもたせ、「問い①」とする。

分からないよ。だって、後ろに何人いるのか、隠れていて見えないから。



【説明する子どもの姿】
啓林館　わくわく算数１

挿絵と問題文を提示すると、答えは「12 人。」と言う子ども、「分からない。」と言う子どもに分かれた。「分からない。」と言った子どもは、挿絵を見て、並んでいる人が、途中から草で隠れていて見えないからという理由だった。「見えなくても分かるよ。」と言った子どもの発言を基に、なぜ 12 人だと分かるのかを尋ね、「３＋９」の式を引き出し、問い①へとつなげた。



【実際の板書】

問題文を提示すると、出てきた数字を足して「８人！」と答える子どもが多く、３～４名が「７人だよ！」と答えた。その子どもの「ずれ」を基に、「どっちかな？」と揺さぶり、「問い②」とすると、仲間と話したり、ノートに図をかいたりして解決しようとする子どもの主体的な姿が見られた。

本時でもたせたい「問い」②

７人かな？８人かな？

「問い」をもたせるしかけ

「前から３番め」と「後ろから５番め」から全体の数を求めるという、１問めとは考え方の異なる問題を提示することで、数字を足して「８人」と考える子どもと、場面を想像して「７人」と考える子どもとに「ずれ」を生じさせ、「問い②」とする。

「問い①」については、子どもの心からの「問い」にはなっていなかった。全体が見えていない挿絵は初めてだったので、「全体が見えないから分からない。」という子どもの発言を取り上げ、「見えなければ分からないのか。分かるのか。」ということを、全体で確認したうえで、「しかけ」となる発問をすれば、「問い①」を全体で共有できたのではないかと考える。また、「問い」の言葉についても、子どもにとって分かりやすく、丁寧なものにするべきであった。「問い②」については、予想したとおりの反応で、子どもに「問い」をもたせる「しかけ」になり得た。

ふりかえりの在り方

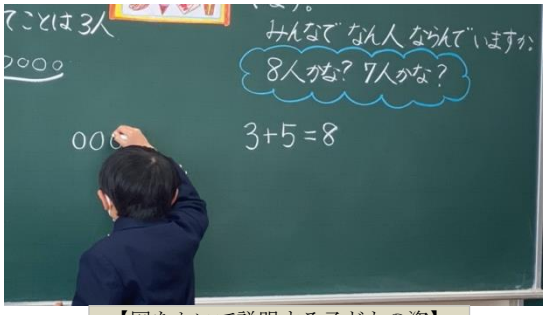
本時において、子どもにふりかえらせたいことは２つあった。

１つは、図に表して考えることのよさを、子どもに気付かせ、子どもの言葉を基に価値付けることで、感じさせることである。

もう１つは、「〇番め」が含まれる問題でも、加法で考えることができることを子どもから引き出し、既習の加法の場面と本時学習とを比較させることで、加法の適用範囲が広がったことを感じさせることである。

図に表して考えることのよさについては、２問めの問題を提示すると、問題文にある数字に着目し、「３＋５＝８で８人」と考える子どもが多くいた。

一方、「７人だよ！」と答えた子どもの発言をきっかけに、「図をかけば分かるんじゃない？」と、図をかいて確かめようとする姿が見られた。すると、図にかいたことで、７人という答えが分かって、納得する子どもの姿が多く見られた。しかし、全員が納得するための時間が足りずに、全体で図に表して考えることのよさを共有するには至らなかった。



【図をかいて説明する子どもの姿】

もう１つの、加法の適用場面が広がったことについては、子どもから引き出すことができなかった。

「ふりかえり」の目的を、「思考力、判断力、表現力等の育成」「よりよい学び方の育成」におき、問題解決の過程で価値付けるべき子どもの姿をふりかえらせることが、数学的な見方・考え方をより豊かで確かなものにしていくことにつながる。本時でも、ふりかえらせたい子どもの姿は、いくつもあった。価値付けたいどんな姿が予想されるのか、それをどのようにふりかえらせるのかを、もっと明確にしておく必要があると考えた。